掛川市に広がった金次郎の教え

大日本報徳社

こんなにりっぱな金次郎さんの教えを掛川に広めた人たちがいたんだよ。その教えを報徳と言うんだよ。その人たちのはたらきで、掛川に報徳の心が根づいたんだね。だから、今でもいろいろな所にたくさん金次郎さんの像があるんだよ。

すごいなあ。どんな人たちかな。上手に教えたから、どんどん広まったんだね。金次郎さんと掛川のつながりがこれでわかりそうだ。

その人たちについて調べてみたいわ。わたしのまわりでも報徳ってことばをよく見たり聞いたりするけれど、これも金次郎さんに関係があったのね。

（1）岡田良一郎と冀北学舎

岡田良一郎

夜明けまで、まだかなりの時間があります。つめたい風がはだをさすようにふきぬけていく、寒い冬の朝のことです。今朝もまた、きびしさの中にも温かみのある先生の声が※寄宿舎内にひびきます。

「みなさん、4時になります。起きる時こくです。さあ、起きましょう。」

先生のよく通る声に、学生たちは、全員がさっと起きました。外は、真っ暗です。

「先生、おはようございます。」

「はい、おはようございます。みんな元気に起きましたね。さあ、今日も一日がんばって勉強しましょう。」

これは、掛川の町の中心より、北に10キロメートルほどはなれた倉真地区にたつ冀北学舎での朝のひとこまです。学生たちに起しょうをよびかけていた先生は、この冀北学舎をつくった岡田良一郎でした。

良一郎は、16才の時、二宮金次郎の門下生となり、4年間にわたって、漢学、経済学、地いきの開発の仕方、人の生き方などの教えを受けました。わずか4年間の勉学でしたが、良一郎は、人の心を考えることの大切さや、地いきをゆたかにするにはどうすればよいのかを、深く考えるようになりました。そして、金次郎がよく口にした、「教育は、社会をつくる。」という言葉を思い出し、1877年（明治10）10月、英語と漢学を教えるじゅくを倉真に開きました。

ある日、一人の学生が、

※寄宿舎：学生たちがねとまりするたてもの

「先生、このじゅくのことを『英学校』とよんでいますが、もっとすてきな名前をつけませんか。」
と話しかけました。すると良一郎は、しばらく考えこんでいましたが、とつぜん、
「そうだ、『冀北学舎』と名づけよう。」
と、力強く答えました。
「冀北学舎ですか。いったい、どんな意味ですか。」
「冀北というのは中国の名馬の産地の名前だ。その冀北のように、ゆうしゅうな人材を世に送り出すのが、ここ冀北学舎の役わりというわけだ。」
と、説明をしました。するとその学生は、
「先生、わかりました。わたしは一生けん命勉強し、冀北学舎の名前に負けないよう、真心をもって人や物につくし、日本を動かすリーダーとなります。」
と力強く言いました。

冀北学舎は、当時としては、とても進んだ学問を勉強できるじゅくとあって、人々の関心は高く、
「わたしも、このじゅくで勉強させてください。」
「おねがいします。わたしにも勉強を教えてください。」
と、言っては、地元の人たちはもちろんのこと、遠くは鹿児島県や茨城県からも学生たちが集まって来ました。そして、1881年（明治14）には、全国から58名も集まりました。

良一郎の教えは、きびしいものでした。夏でも冬でも、朝4時に起しょうし、明るくなるまでの間はランプの明かりで読書をさせました。夜が明けると、舎内のふきそうじ、草とり、道路のそうじを行わせ、それらが終わるとようやく朝食にす

るという朝の生活をつづけさせました。

中でも、学生たちがもっともいやがったのは、便所そうじでした。学生のほとんどは金持ちの家庭に育ち、自分の家ではそうじなどしたことがありませんでした。ましてや、便所そうじなどはじめてのけいけんでした。学生の中には、

「なぜ、わたしが便所そうじをしなければならないのですか。」

と、良一郎にもんくを言う者もありました。しかし、良一郎はそんな学生に対して、

「便所はみんなが使うところです。その便所をきれいにすれば、みんながよろこぶでしょう。みんなによろこばれて、あなたもうれしく感じることができるはずです。」

と話して聞かせました。やがて学生たちは、みんなの便所だということで、たがいにきれいにそうじするように心がけ、便所そうじ当番をそれほど苦にしないようになりました。

こうして学生たちは、良一郎のもつ偉大な力に引きつけられて、一生けん命勉強しました。

また、教える先生たちは、広く日本中から集まりました。その中で良一郎は全体をまとめ、先頭に立って自分の理想を語りました。教える内容は、そのころの日本としては、とても質の高いものでした。

そして、こうした冀北学舎での教えは、明治の世に数多くのすぐれた人物を送り出すこととなりました。多くの学生たちに学問を教え、地いきや日本全国で活躍した人たちを育てたことは、大きなこうせきでした。

この冀北学舎は、1884年(明治17)7月、世の中のへん化によってとじましたが、その名前は、今でも地いきの人たちのほこりとして語りつがれています。

現在は大日本報徳社内にある冀北学舎のたてもの

なっとく金次郎⑧

掛川に
報徳の教えを広めた
岡田家の人々だよ。

岡田家の人々と掛川市とのむすびつき（かかわり）について調べよう。

岡田佐平治（1812年～1878年）

- 倉真の農家に生まれる。
- 倉真に報徳社をつくる。（1849年）
- 息子の良一郎を4年間、金次郎のもとに入門させ、報徳の教えを学ばせる。
- 金次郎の教えを受け、生活にこまっている人を助けたり、新しい田畑をつくったりする。
- 遠江国報徳社をつくり、初代社長となる。

岡田家の本家

岡田良一郎（1839年～1915年）

- 佐平治の長男として倉真に生まれる。
- 二宮金次郎の弟子となる。（1854年）
- 父とともに遠江国報徳社をつくり、2代目社長となる。
- 自分の家に「冀北学舎」をつくる。（1877年）
- 日本ではじめての信用組合（今の掛川信用金庫）をつくる。（1879年）
- 静岡県立掛川中学校（今の掛川西高校）の初代校長となる。（1880年）
- 遠江国報徳社を「大日本報徳社」と名前をかえ、全国の報徳社の中心となる。（1911年）

多くの人を育てた「岡田良一郎の学問の考え方」

英語や漢学のほかにも、心を育てるために作詩や作文を取り入れ、報徳についても教えた。日曜日の午前中には、農作業や道路のしゅう理などを行い、仕事をすることの大切さを教えた。

岡田良平（1864年～1934年）

- 岡田良一郎の長男として生まれる。
- 大日本報徳社の3代目社長となる。（1912年）
- 国会議員や文部大臣となり国のために活躍する。

一木喜徳郎（1867年～1944年）

- 岡田良一郎の次男として生まれる。
- 袋井市の一木家の養子となる。
- 内務大臣や文部大臣、宮内大臣となり国のために活躍する。
- 兄良平のあとをうけ、大日本報徳社の4代目社長となる。（1934年）

（2）倉真財産区林

岡田良一郎が22才の時のことです。父のあとを受けつぎ庄屋になった良一郎は、報徳の教えをいかして、倉真をゆたかな土地にしたいものだと考えていました。しかし、農業をさかんにしたくても、谷あいの村では田畑を広げるにもかぎりがあります。良一郎は、（この村につらなっている山を何とかうまく利用する方法はないだろうか。）と考えていました。

そのころ、倉真の山の多くは、ぞう木でまきを作ったり、草かり場として利用したりするくらいで、村の人々のくらしをゆたかにするためには、さほど役立っていませんでした。

良一郎は、山の利用法を考えたすえ、

「区の倉真の山に、杉やひのきを植えれば、何十年後かには、ゆたかな村に生まれかわる。」

と、村人に木を植えることの大切さやよさをくわしく話しました。

しかし、ぞう木林を切り開いて木を植える仕事は、なみたいていの仕事ではありません。力のいる仕事のうえに、人手もいり、日数もかかります。毎日のくらしにせいいっぱいの村人には、木を植えるゆとりなどありませんでした。

「木を植える山の仕事をするのはよいが、自分の田畑の仕事はだれがやるのだ。」

「木は、40年以上もたたないと使いものやお金にはならない。」

「だいいち、大苦労して育てても、使いものになるまで生きているかわかりゃしない。まったくばからしいことだ。」

と言って、さんせいする人はほとんどいませんでした。

しかし、良一郎は、

「たしかに、今のみんなには、木を植えるゆとりはないかもしれない。だが、私たちのような苦しいくらしを、かわいい子どもやまごにまでさせてよいのかね。そこのところをよく考えてみないといけない。」

と、一人一人に熱心に話して回りました。

しばらくして良一郎のわかりやすく心をこめた話に、村人は木を植える大切さがわかり、その作業を開始しました。足をふんばっていないとすべり落ちてしまう急なしゃ面に、くわをふるって木を植える仕事は、さいしょ思っていた以上に大へんで、きけんな仕事でした。

そのため村の人の中には、

「こんな仕事を毎日やっていたのでは、体がもたない。木を植えることをやめたい。」

と、良一郎に言い出す者が何人も出てきました。

良一郎は、このような人たちをはげましながら、村人といっしょにくわをふるい、木を植える作業にうちこみました。

こうして、ようやく※牛の下地区に5※町の植林を完成させました。良一郎は、（これで、何十年後かには、この倉真はゆたかな村に生まれかわることができる。）と、苦しい仕事をふり返り、村人と完成をよろこび合いました。

ところが、せっかく植えた山の木も、2年後、山火事ですっかりはいとなってしまいました。村人たちは、がっかりして、二度と木を植えようとする気持ちにはなりませんでした。

1889年（明治22）に、国のきまりがかわり、村のくらしを立てる費用の大部分を、村でまかなわなければならなくなりました。

※牛の下：倉真の地名

※町：１町＝1ha（100m×100m）＝100a。運動場ほどの広さ。

掛川市に広がった金次郎の教え

良一郎は、村長に、
「このような時代になったからこそ、もう一度、木を植えて村の費用を作らなくてはならない。」
と、さらに木を植えることの大切さを語りました。

良一郎の考えの正しさを知った村長は、さっそく村の山々に木を植える計画を立て、村人を熱心に説得しました。ところが、前の山火事でこりごりしている村人たちは、
「もうそんな話にはのらないぞ。」
「あんな一文にもならない仕事は、まっぴらごめんだ。」
と、役場におしかけ大声で反対しました。村人たちのそのあまりのはげしさに、役場ではたらいていた人たちは、村長を一人のこして、にげ出してしまいました。

しかし、村長は、村人一人一人に、命がけで自分の考えの正しさを話して聞かせました。さすがの村人たちも、村長の考えをだんだんと理かいし、木を植える仕事が、ふたたび始まりました。そして、1912年（明治45）までかかってやっと完成しました。

当時木を植えた人々やそれを指導した人は、ほとんど木を植えたおんけいを受けずにこの世をさりましたが、その後、山の木は村の人たちのくらしをゆたかにするために大へん役立ちました。
「倉真はゆたかな村だ。」
と、まわりの村からうらやましがられるようになりました。

山の木々は、村の人の心をなごませ、美しくすんだ水は、かれることもなく倉真川に注ぎこんでいます。

倉真に住む人々は、昔の人々の努力に感謝して、今でもこの山々を「財産区林」とよんで、大切に守り育てているのです。

なっとく金次郎⑨

倉真財産区議長さんのお話

今でも、地いきのみんなで山を大切に守っています。山は、手を入れないと、えだがふえ、ふえたえだで木の下まで光がとどかなくなってしまいます。そうなると、光がひつような下草が育たず、山は死んでしまうのです。

そこで、毎年、冬になると、約3ヘクタールの山の間ばつや下草がりをみんなで行っています。今、作業をしている人は、60才ぐらいの人が多く、しかも木はとても高いので大へんな作業です。また、昭和30～40年代ごろより、外国から安い木材がたくさん入ってきたことや、木を切ってせい品にするにはお金がかかってもうけがないことから、財産区林からしゅう入を得ることはなかなかできません。そのため、今は、植林はほとんど行われていません。

しかし、これからも倉真の自然や地球環境を守るためにも、みんなで山を大切にしていきたいと思っています。

今でも受けついでいる人たちが
掛川市にもいるんだ。

（3）風吹トンネル

土方地区入山瀬の県道のかたわらに、大きなトンネルの形をした記念碑があります。

風吹トンネルの記念碑

この記念碑は、今から110年以上も前、この場所にトンネルをつくるために力をつくした青野卯吉をたたえたものです。トンネルの名前は「風吹トンネル」。平成11年にバイパス道路ができてからは使われていませんが、この地区の人たちの生活にとって、なくてはならないトンネルでした。

風吹トンネルができる前の土方地区の人たちは、掛川の町に行くのに、大へんな苦労をしていました。それというのも、このあたりは、三方を高い山にかこまれ、その上、掛川に向かう風吹峠の道は、曲がりくねって急な坂道がつづき、「三町七曲がりの険」と言われるほどのけわしさでした。そのため、土方地区の人たちは、村でできたお茶を掛川の市場に出そうとしても、大きな荷車が使えず、馬にせおわせるか、自分たちでかついでいくしかありませんでした。そのため、掛川の町に通じる近道がほしいというのが、この地区みんなのねがいでした。

青野卯吉は、江戸時代の終わりごろ、土方村の入山瀬に生まれました。土方村の村長や、土方銀行の頭取もつとめ、村の中心になってはたらいていた人でした。

村人たちがこまっている様子を見て、卯吉は、（風吹峠のせいで掛川に行けないのでは、みんなのくらしは楽になっていかない。今のままでは土方は、他の地区から取りのこされてしまう。なんとしても風吹峠にトンネルがほしい。）と考え、風吹峠にトンネルをほ

ろうと決意しました。そこで、計画を村人たちに熱心に話し、協力をおねがいしました。

村人たちは、トンネルをつくることの大切さはわかってくれたものの、じっさいにほることにさんせいする人は一人もいませんでした。それは、風吹峠が、地形のけわしさにくわえて、「かいもち」とよばれるとてもかたい岩でできた土地だったからでした。

「風吹峠の岩は、かたくてかんたんにはほれないよ。」

「こんな大へんな工事は、村のお金では、とてもできないだろう。」

と、だれも卯吉の計画に耳をかたむけようとはしません。

それでも卯吉の決心は、ゆらぎませんでした。

「わたし一人でもやらなくては。」

と、一人で何日も山へ入り、トンネルづくりのための測量を始めました。測量にかかるお金は、すべて自分の家から持ち出したものでした。

そのような卯吉のひっ死の行動に、はじめは相手にしなかった村人たちも、やがて心を動かされ始めました。

しかし、問題は当時のお金で2,000円という工事にかかるお金でした。これは、土方村が1年間に使うお金の半分近くにもなる大金だったため、（これは、自分の家のざいさんを全部出しても、とてもはらえるお金ではない。）と思い、卯吉はこまりはててしまいました。

そのとき、知り合いの人から、

「報徳社の岡田良一郎社長に相談すれば、きっと力になってくれるよ。」

という話を聞きました。岡田良一郎は、二宮金次郎の教えをもとに、遠州地方を中心に村起こしをすすめていた人でした。

そこで卯吉は、さっそく良一郎をたずね、熱心に計画を話しました。すると、良一郎は、

「それは大へんな計画ですね。でも、土方村をよくするためにぜひがんばってやりとげてください。」

と言って、1,000円という大金をトンネルをほるためにかすことを約束しました。

「ありがとうございます。これで、トンネルをほることができます。」

工事のめどが立ち、卯吉の心に光がさしました。

風吹トンネルをほる工事は1900年（明治33）に始まりました。予想していた通り、1メートルをほるのに5日間もかかるような大へんな工事でした。それでもねばり強くほりつづけ、2年かかって、ついに三つのトンネルをほりあげました。

トンネルの大きさは、高さ2メートル、はば2メートル。人が荷車をひいてやっと通れるぐらいでしたが、このトンネルを通って掛川の町にお茶を運ぶことができるようになりました。村の人たちは、

「このトンネルができたおかげで、これからは今までよりずっと楽に掛川の町まで行けるな。」

「これで土方のお茶を掛川の町にいつでもたくさん売りに行けて、村もゆたかになるよ。」

と、みんな大よろこびでトンネルを通っていきました。

そのすがたを見て、卯吉もうれしそうにほほえみました。